

# 追憶

靜 堂

島智良教師が中心になつて新寮と學校との間の空地に瓢箪池が堀られ金魚が放たれた、新寮の水桶の落水を利用して水車が作られ島様の部屋の前の鈴がチン／＼と間を置いて鳴る様に出来てゐる、會計寮の前にも同じ様な水車で二階の窓の所で鈴が鳴つて居る、御次寮には悟水公園が出来て噴水が可愛らしく上つて居る、土曜日の午後は定つて鋤をかついで運動場の開殖作業だ、こんな空氣の中に十五才の可愛い小法師が夕方になると洋燈掃除を云ひ付けられてよくホヤを碎いては葉山さんの所へ貰ひに行つたものだ、それが私の廿年前の姿であり仕事であつた。ほんとに平和だつた。其の當時の出来事の一ツ一ツを思ひ出しても懐かしい、學校としての形から云へば極めて幼稚なものではあつた、然し學院全体が心と心に依つて結合せられて居た完全な人格であつた。自分はいつもそう思ふが學校は單なる智識の賣買機關であつてはならない、渾然たる人格であるべきだ。形式が如何に完備されても只それ丈ではロボットと變りはないのだ、融和された渾然体、それが理想的な學府であり、其處に確固たる學風が起り、其の中からこそ威大なる人格者が生れるのだ。昔の塾から人材の輩出したのも宜なるか

なである。

林長様（今の中村執事長）はこわい人だと思つて居た、島様は能く怒言を云ふ人だつた古庄様、内藤様と思ひ出せば皆それ／＼特殊な人格を持たれてゐたが、それが綜合されて學生の上に動いてゐた。

此の頃の學生の唯一の楽しみは山遊びだつた、今頃になると三々五々除草鎌を持つて山の芋を堀りに行つたものだ、最後新寮の柱にもたれて帶を緩めた事も思ひ出の種だ。願滿の澤に島様、田附様を圍み、私の師匠も仲間入りして初茸汁を飽食した事もあつたが御二人共已に過去の人となられ師匠も已に逝き轉た寂寥を覺ゆる。

大正二、三年の頃學院の形式も内容も大々的に改革せられ法主は慈聖人を院長に奉戴し、關本師教頭として來任、武田監督學監の椅子に就き、島、古庄師等去りて、龜口、遠藤、小林、青木、島田、吉田、兩藤田、山口、深澤等の諸教授を迎へ内容は着々充實し更に武生青山氏の淨財を投せらるゝありて現在の校舍は新築せられ、それ迄舊校舍（今の統學寮）に、納骨堂、釋迦堂、鶯谷寮等の一隅に時間毎に廻り歩いたのが各級の教室が定まり學校らしい形になつて來た。祖山學院の歴史は此の改革時たる大正二、三年頃からだといふべきだらう。

形が整ひ、教職員の数も従前の何倍かになり従つて學生の数も年を追ふて増加するに従つて、船頭多くして、船山に上るの概が無いでも無かつた、制帽問題で大騒ぎを引き起し、つまらない事が原因して學院師徒全体を二派に割つてしまつたなどは正にその適例だ、此の感情の縛れは餘程後迄残つて居た様に思ふ。

さはあれ大正九年には現在の庭球コートが出来し誰が見ても學校らしくなつた。日慈聖人御代を通して祖山學院は異常の發達を來した實に日慈上人と武田學監は學院の育ての親であつたのだ。此の慈上遷化せられて已に十年になる。前後十三年膝下に奉仕し大正十二年三月廿二日夜吸入酸素を持つて東京より馳せ參し御枕邊に膝行した時は已に御臨終の時だつた。想起するだに涙を覺ゆる。其後の十年間に學院は随分變つた此の間にあつて布和尚が山の内外に對する眞摯なる御努力は永久に身延山史の上に残るであらう。特に常に寸暇を割かれては學院に見えられ諸教師の教授振りを視察し批評を垂れ、缺席教師の時間を利用しては學生に修身の講話をなされし如き自ら師徒をして緊張せしむるものがあつた。此の慈布兩和尚の事は日を経るに従つて其の高徳が偲ばれる。

七十七代の法主中田日布上人に依つて祖山青年燈燼會は生れた、是が島智良師に依つて形を整へ、祖傳、及靈場、持師、蒞師、臨師等の遺跡の幻燈を以つて布教の唯一の道具としてゐた。其の時代の

生徒は中等部一年に入學すれば文句なしに幻燈の説明をさせられたものだ。此の燈燿會が祖山學院同窓會と改稱せらるゝに至つたのは慥かに大正一、二年頃と記憶してゐる。主唱者は伊藤海聞師等だつた。越へて同窓會の會則が泉義敬君、森亮遠君等に依つて起草せられ、文學、運動、辯論の三部が設けられ、青木見孝師が文學部長に就任せられ、從來の鷲峰が、日慈上人の御指示に依つて棲神と改稱せられ、茲に棲神第一號が謄寫版に依つて生聲を擧げた、産室は旧納骨堂の片隅であつた。それが翌年には活版刷の第一號が發行さるゝ運びに至つた、學生等は自分の書いたものが活字になる樂しさで競つて原稿を書いたものだつた。

小林是恭師、藤田惠曉師の辯論部、島田慈秀、田附善苗師の運動部等、學生も努めたものだが、各時代の部長に依つて同窓會の事業内容もズン／＼發展して行つた、此の時代を同窓會の進展時代と稱し得べくんば現在には守靜時代と稱すべきであらう。其の當時机を並べた友にして今や宗門内に推しも推されもせぬ地位を占めてゐるものがあるかと思ふと、已に他界して其の名さへ忘れられてゐるものもある。追憶は樂しみであり又悲しみである。